

2025/9/1

関係各位

Far East Group

会長 大嶋 謙嗣

会報九月号 日本語と英語

目次

- ・言葉という道具
- ・日本語
- ・英語
- ・発展と調和
- ・在り方と選択
- ・稽古も然り

●言葉という道具

約一年、オンライン英会話を楽しんでいる。そこで日本語と英語の根底にある価値観の違いに触れている。二つの言語は対照的でとても面白いので、釈迦に説法であるのは重々承知しているが、シェアしてみたいと思う。キーワードは「日本語は発展よりまず調和、英語は調和よりもまず発展」。発展と調和は共に不可欠なものだが、その順番が日本語と英語では違う。

そもそも、言葉はただの道具ではない。言葉の奥には、その民族が千年万年かけて刻んできた生き方が宿っている。言葉の違いとは生き方や世界観の違いなのだ。その違いを知らずに、翻訳したから理解できると思うのは、結果として自分の使う言葉で自分を縛ってしまうことになる。では早速、日本語と英語を見てみよう。

●日本語

日本語は、調和や関係性やその場の空気をまず大切にしようとする。二六〇〇年前に神武天皇が我が国を立ち上げた時の、その建国の精神が「和」であり、建国の理念が「八紘一宇（世界を一つの家族のように互いの違いを認めながら和していく）」であったように、まず「調和」を置いた。それを引き継いだからこそ、十七条憲法も「和を以て貴しとなす」なのである。もちろん、周知のように「和」とは只の仲良しごっこではない。己を律し、相手を尊び、お互いが自立してお互いの響き合いの中から生まれる調和・協力・共生だ。そして、そんな関係性の中から物事は発展していくのだ。「易经」も、陰陽の動的調和により造化の道を進むということを、世界の構造と秩序として示してくれている。陰陽はお互いを呑み込み、相補し、巡り合い、そこ

に秩序を立てる。

言い換えれば、私に言わせれば、日本語は「俯瞰の言語」である。全体を見渡し、自己よりも他己との関係性を重視して調和を図ろうとする。そして、必要な部分を具体化させるのである。日本語の根っこは調和にあり、調和の中から発展へと向かうのである。

●英語

一方、英語の世界観は「挑むこと」「進むこと」を旨とする。百三十八億年の宇宙の物語も、生命四十億年の歴史も、進化と発展の連続として語られる。ビッグバンによる誕生。爆発し、広がり、星々が生まれる。進化論を採るならば、やがてそこに生命が芽吹き、進化し、人間へと至る。生き残るのは挑戦してきた者たちだ。環境に適応してきた者たちだ。そこに新たな秩序が形作られていく。

例えば、*boom* や *promises* は日本語に訳すと計画や約束だが、英語ではどちらの言葉にも前向きな意味が含まれている。英語の響きは基本的に「前進」だ。ポジティブがデフォルトだから、放っておいたら勝手に前に進んでしまう。それを否定するなら早く示さねばならない。だから *early* は早い段階で言う。日本語とは対照的だ。

英語の魂は、進歩・発展を先に置く。調和とは、発展の先に結果として現れるものだと思えるのである。

言い換えれば、英語は「放射」の言語である。先ず進歩発展させる主体（主語）を中心に置き、そこから発展や進歩に向けて放射させる。だから日本語と違って、「主語」とその「動き」はとても大切となる。

●発展と調和

日本語と英語を対照的に捉えたのは、お互いの優劣をつけるのではない。陰陽の相補関係と捉えて、己の誠を通すために、両方を武器としたいがためである。

改めて考えてみたい。ここに二つの対照的な道がある。「調和から発展」という日本語の道と、「発展から調和」という英語という道。どちらが正しいのか。その質問そのものが間違いだ。両方とも道であり、順序が異なるだけだ。日本語の価値観で考えるなら、発展よりも調和に重きを置くという視座から物事を見るし、英語の価値観で考えるなら、調和よりも発展という視座で見ているというだけのことである。どの角度から物事を見るかという話だ。大事なのは、自分が今どの視座から物事を見ているかを自覚しているかどうかだ。

ここは肝心なところだ。どちらも調和と発展を大切にしている。ただ、その優先順位と出発点が異なる。この違いを自覚するだけでも、世界を多面的に見ることができるのではないか。

●在り方と選択

我々はどうすべきか。私の答えはこうだ。「己の誠を貫く」という在り方の為に、その時によって発展と調和の比重を変える。攻めねばならぬ時は発展を先に置き、守らねばならぬ時は調和を先に置くことを基本としたい。一方に偏れば、いずれ行き詰まる。発展ばかりを求めれば心は荒れる。調和ばかりを求めれば力を失う。大事なものは「自在に变じる」ことだ。状況や立場や状態に応じて切り替える。そしてそれこそが「易」の本質でもあろう。変化を拒む者に未来はないが、それは己の誠を貫くために不可欠だからそう言っているのだ。自在と言っても、自分自身の中にコンパスや尺度は必要だ。それが「己の誠を欺いていないか」という自分自身との対話から生まれる自分自身の中核だ。その上で、自分の在り方や志を定め、在り方を貫き、志を果たす為に「発展」と「調和」を自在に使いこなすことが理想だ。ただ、日本語を普段使っている我々は「調和」に偏りがちになることも少なくない。だから、本当の意味で調和へ向かうなら、「発展」にやや比重を移すことも大切だと思う。

●稽古も然り

道場での稽古も同じである。拳を繰り出すときは発展だ。前に進め。相手を圧倒してよい。だが、呼吸を合わせる時は調和だ。相手の気を感じ、共鳴し、流れを掴む。これらの切り替えができてこそ、稽古は生きる。発展ばかりを求める拳では、ただの暴力となりかねない。調和ばかりを求める拳は、ただの形骸になる。両方あって自在に活かしてこそ武である。繰り返すがその奥にあるのは「己の誠」である。

発展と調和を自在に操り、時に応じて（時中）切り替えられる男。それが強く優しい男だ。強さだけでは荒む。優しいだけでは折れる。「強くなくては男は生きていけない。しかし、優しくなければ生きる資格はない」のである。両方を兼ね備え、必要な方を立てられる。それが「生きた男」の姿である。そして、相手と共鳴を図り、響創の道を歩む。それが武の道、男の道だ。

そのうちに、精神の中核である「己の誠」について話してみたい。四書の一つである「大学」でいう「誠意…自らを欺かない」「正心…己の誠に心を止まらせる」である。

まだまだ暑い日が続く。今月も健康と健闘を。